令和元年～令和５年度文部科学省教育課程特例校
令和元年・２年度　新宿区教育委員会研究発表校

楽しみに思える未来を創造する児童の育成

～「みらい科」「教科学習」を通して～

新宿区立落合第六小学校

研究主題設定の理由

1　研究主題

楽しみに思える未来を創造する児童の育成

～「みらい科」「教科学習」を通して～

2　研究主題設定の理由

（1）今日的な課題から

今、私たちはかつてない大きな社会の変革期にいる。知識、情報、技術をめぐる変化の速さが大変速く、情報化やグローバル化といった社会的変化が人間の予測を超えて進展するようになってきている。

このような時代であるからこそ、人間の強みである「感性」、「創造性」、「協働性」などを生かし、一人ひとりが未来の創り手となっていく必要がある。人間の強みと最先端技術によって創り出される未来は、私たちにとって便利で過ごしやすい社会になるであろう。

このような社会の状況を受けて、本校では、生涯にわたり「変化に富んだ新しい時代の中で人間らしく豊かに生きていって欲しい」という思いから、人間の強みである「感性」、「創造性」、「協働性」などを生かして未来を切り拓いていく児童を育成するために、研究主題と副主題を「楽しみに思える未来を創造する児童の育成　～「みらい科」と「教科学習」を通して～」と設定し、めざす児童像を児童の主体性を軸にした「自分で考え、判断し、行動できる児童」とした。

（2）本校の研究のあゆみから

本校は（1）で述べたような社会の変化を見据え、平成 28 年度・29 年度 新宿教育委員会研究発表校として「共に未来を創造する児童の育成 ～これからの資質・能力を育むカリキュラムデザイン～」をテーマに研究発表を行った。この時の研究の要であった「縦割り創造活動（通称：おちろくＤＡＳＨ）」は平成 29 年度から始まり、今年度で４年目を迎える。これまでの取組の課題として、「縦割り創造活動ではいきいきと活動している様子が見られるが、教科学習ではその主体性が発揮されていない」ということが挙げられた。

このような課題の改善と本校がめざす児童の実現のために、児童が教科学習の枠を超えて、様々な場面で学んだことを生かし、主体性を発揮できるような学びを創り上げていく必要があると考えた。そこで、教科横断的な学びや、実社会で生きて働く学びも取り入れて組み立てた教育課程を新たに取り入れるために、文部科学省の教育課程特例校の指定を受け「みらい科」を新設することにした。さらに、教科学習での学習内容を「みらい科」に生かしたり、「みらい科」で養った実践力や思考力を「教科学習」に生かしたりと「みらい科」と「教科学習」の双方においてスパイラル的に児童の主体性を伸長していくための授業改善に取り組むこととした。

研究構想図

教育目標

【新宿区教育目標】
○広い視野と、自らを律し互いを認め、思いやりの心をもつ人
○地域の一員として、規範意識や公共の精神に基づき、社会の形成に進んで参画する人
○個性や創造力が豊かで、自ら学び、考え、行動する人

【落合第六小学校教育目標】
☆明るい子　人格を尊重し合い、社会性豊かな子ども
☆たくましい子　心身共に健康で、ねばり強く行動する子ども
☆考える子　ものごとを深く考え、主体的に行動する子ども

課題

【今日的な課題】
予測不能な未来
変化が大きい社会

【本校の課題】
「教科学習」において、おちろくＤＡＳＨのような児童の主体性が見られない

教育課程特例

「みらい科」の創設
社会と連携・協働しながら未来の創り手となるために必要な資質・能力を育む教科

研究主題

楽しみに思える未来を創造する児童の育成
～「みらい科」「教科学習」を通して～

目指す児童像

自ら考え、判断し、行動できる児童



研究内容

「みらい科」「教科学習」において大切にしたい３つの研究の視点

視点	教師が共通で取り組む手立て
自ら活動に取り組むために	・実生活と関わりのあるテーマの設定 ・課題や解決方法の選択ができる学習計画 ・何度もやり直しができる場の設定
考え・判断できるために	・思考・判断のための素地の醸成 ・成果と課題の可視化 ・ふりかえりの工夫
行動できるために	・個性が表現・発揮できる場の設定

研究内容

本校では、「みらい科」「教科学習」の双方において、様々な学習で得た知識を総合的に使う経験を積む中で「自分で考え、判断し、行動できる児童」を育成したいと考えた。

前提として、「肯定的・共感的人間関係の構築」は本校の教育活動を支える土台であると考えている。児童は、周囲から受け入れられるからこそ、自分なりの考えをもったり、行動したりすることができ、自分の存在が認められ、「自分は役に立っているんだ」という自己有用感を味わうことができる。それが学習意欲を支えるものとして大切なことだと考えた。

教師が共通で もつ姿勢	・信じる　・良さに気付く ・認める　・寄り添う
目指す児童の姿	・興味・関心の高まり ・学びへの意欲の高まり ・自分自身と他者を認める姿勢

さらに、「自分で考え、判断し、行動できる児童」を「自ら活動に取り組むことができる」「考え、判断することができる」「行動することができる」という以下の３つの視点から整理し、具体的な手だてを講じることで目指す児童像に迫っていくことにした。

１　自ら活動に取り組むことができる児童にするために

「自ら活動に取り組むことができる」とは、学ぶことに興味・関心をもち、粘り強く取り組んでいる姿であると捉え、「みらい科」や教科等の学びの中で、以下の取組を進めた。

第一に、学習に社会生活の中で必要となる内容を取り入れ、課題を身近に感じさせるとともに、学習の必要感を感じ取らせていく。

第二に、答えが一つではない「問い」を用意したり、学習形態や学習方法の選択肢を示したりする。児童と共に適切な課題を設定した上で、児童が学習の進め方を自分自身で選択することで、内発的動機付けが高まり、学習への意欲が一層高まると考えた。

第三に、日々の学習の中で、失敗しても、その原因について考え、再挑戦できる場を設定していく。児童が学習の中で経験したことを基に、それまでの活動を振り返り、学習の進め方を修正し、再挑戦できる場を位置付ける。これにより、児童が自分自身の進歩を実感し、やる気にもつながっていくと考えた。

教師が共通で 取り組む手立て	・実生活と関わりのあるテーマの設定 ・課題や解決方法の選択ができる学習計画 ・何度もやり直しができる場の設定
目指す児童の姿	・「まずはやってみよう」という挑戦する姿勢 ・失敗してもやってみる姿勢 ・「〇〇についてやってみたい」という思いをもつ

２　考え、判断することができる児童にするために

「考えることができる」とは、既存の知識と新たに獲得した知識・技能を適切に組み合わせて、それらを活用しながら問題を解決していくために必要となる思考ができる児童の姿と捉えた。また、「判断することができる」とは、必要な情報を選択し、解決の方向性や方法を比較・選択し、結論を決定していくために判断したり、意思決定したりすることができる児童の姿と捉えた。このような児童を育むために、本校では、「みらい科」や教科等の学びの中で、以下の取組を進めた。

第一に、体験活動の充実を図り、思考や判断に必要となる様々な知識や技能を豊かな体験活動を通して獲得できるようにした。インターネットやマルチメディアで容易に情報を集められる時代にあっても、本物の技術に触れたり、児童自身が活動を体験したりと五感を働かせて学び取ったものは深く記憶に残る。さらに、体験活動は、児童を日常とは違うフィールドに立たせ、これまでに学んだことを生かして思考・判断し、与えられた課題の解決を図る機会にもなると考えた。

第二に、自らの学びを振り返り、学習を調整する場面を「みらい科」や教科等の学びの中に意図的に位置付けた。解決の方向性や方法を選択・判断できる機会を設けることで、児童は結論を決定していくために必要な判断や意思決定の力を身に付けることができると考えた。

そこで、本時の振り返りだけではなく、ゴールを意識して学習活動の見通しについても振り返ることで、「なんとなく」活動に取り組むのではなく、自分の状況を分析し、必要に応じて学習の進め方を調整しながら活動に取り組むことができると考えた。

第三に、児童が考えたり判断したりしたことを可視化する手段として「グラフィックレコーディング」を取り入れた。可視化することにより、見えない関係を顕在化させることができ、新しい知のまとまりや、つながりに気付くことができる。また、考えたことを多様な方法で表現することにもつながる。

教師が共通で 取り組む手立て	・思考・判断のための素地の醸成 ・成果と課題の可視化 ・ふりかえりの工夫
目指す児童の姿	・新しい価値に気付く

３　行動することができる児童にするために

「行動することができる」とは、児童一人ひとりが各教科や「みらい科」で学んだことを生かし、学校や地域における自分たちの生活をよりよくするために、各自が個性を発揮しながら何らかの取組を実践していくことと捉えた。

ここでは、個性が表現・発揮できる場を意図的に設定した。自分らしさを発揮して他者にもその良さを認めてもらうことは喜びにつながる。また、人と刺激し合う関係をもつことは、児童の活動に対する意欲を維持することにつながる。集団の中で、個性を発揮することが苦手な児童もいるが、自ら考え判断して取り組んだ課題や活動内容を友達や他学年に伝え、称賛されることで、次への自信につながるだろうと考えた。

教師が共通で 取り組む手立て	・個性が表現・発揮できる場の設定
目指す具体的な 児童の姿	・価値観の広がり ・楽しさの質の高まり

みらい科

1　みらい科の概要

本校では、これからの変化の激しい時代においても自律して学び続ける人材の育成に向けて、文部科学省教育課程特例校の指定を受け、全学年を通して「みらい科」を創設した。

児童が教科学習の枠を超えて、さらには教室の壁を越えて取り組む「みらい科」の学習では、各教科での学びや、学び方も自覚的に結び付けることで、学校教育から離れたところでも活用することができる能力の育成が可能になると考えた。

「みらい科」の実施に当たっては、以下の教科・領域から時間を充てて実施し、時数を減じた各教科等の内容については、「みらい科」の中で以下のように位置付けている。

教科等	「みらい科」に充てる学習内容	左記の学びにより「みらい科」で見られる児童の姿	「みらい科」における実践						
			DASH	DASH Jr.	オープンスクール	おちろく探究算数	おちろく班遠足	GR	プログラミング
国語科	「話すこと・聞くこと（話し合うこと）」 「書くこと」の一部	・自分の思いや考えが相手に伝わるように表現する ・相手が伝えたい事柄を正確に理解する	○	○	○	○	○		
特別活動	「学級活動（１）ウ　学校にける多様な集団の生活の向上」 「学級活動（２）イ　よりよい人間関係の形成」に関わる活動の一部	・自発的・自主的に活動を進める	○	○	○	○	○		
総合的な学習の時間	「横断的・総合的な課題（現代的な諸課題）」の一部	・実社会や実生活の中から問いを見いだし、自ら課題を見つけ、自ら考えて判断し、よりよく問題を解決できるようにする ・他者との関わりを通して、自分の考えを深め、広げることの尊さを理解し、よりよい未来を拓く一員として地域・社会に参画しようとする	○		○	○	○	○	○
生活科	「身近な人々、社会及び自然と関わる活動に関する内容」の一部	・自分自身や自分の生活について新たな気付きをする力		○	○				
社会科	「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」の一部	・観察や調査した事柄を関連付ける力	○			○	○	○	○

	国語科	特別活動	総合的な学習の時間	生活科	社会科	合計
１・２年生	１０	５		２０		３５
３・４年生	１０	１０	３０			５０
５年生	１０	１０	３０		５	５５
６年生	１０	１０	４０		５	６５

２　みらい科で育成する能力

「みらい科」で育成を目指す資質・能力について、以下のように整理した。

学年ごとに整理したものは、７頁に示す。

（１）思考力

私たちは、自分の経験や知識を新たに学ぶ知識と結び付けたり新しい知識に再構成したりして、自分なりの考えを創り変える。その過程で、知識を活用できる深い理解を可能にし、主体的な学びができるようになるためは、理由や根拠まで問題を深く追究して納得する経験や、その思考プロセスを内省的に振り返り、学び方を学ぶといった経験を繰り返すことが求められる。社会や生活の中で問いを立て、直面する課題を主体的に解決できる学び手になるために、論理的・批判的・創造的に深く考え、自らの学びを省察する高次の思考力の育成する必要がある。

そこで、本校では、前述した「考え、判断することができる児童」の姿を「思考力」として、以下の５つに整理し、「みらい科」での育成を目指した。

①問題解決・発見力

個人あるいは集団で問題を発見し、解ける形に問題を定義し、解決策を考え、実行するための思考力

②論理的思考

根拠を基に主張や結論を引き出す思考力

③批判的思考

どのような情報を信じ、どのような行為を取るかを決めるために、合理的・反省的に考える力

④創造的思考

これまでとは違った新しい解決案を提案できる考え方

⑤メタ認知・学び方の学び

自分の問題の解き方や考え方について考え、よりよく調整しながら自らの学習をコントロールする力

（２）実践力

変化の激しいこれからの時代を生き抜いていくためには、周りと関わりながら、自らの生き方や生活の仕方を主体的に選んでいく自律的活動、様々な人との相互理解を深め協働して問題を解決していくことができる人間関係の形成、社会や自然の課題と向き合い、新たな価値を創造していく力が求められる。こうした力を育むために、実生活や実社会の中で、児童自身が主体となり、多様な人々と関わり合い協働しながら、具体的な課題を創造的に解決していく経験が必要となってくる。

そこで、本校では、前述した「行動することができる児童」の姿を「実践力」として、以下の３点に整理し、「みらい科」での育成を目指した。

①自分自身

自分自身について理解し、活動に生かしていく力

②他者や集団

他者を理解・尊重しながら、活動をすすめていく力

③社会や自然

実生活や実社会の課題を探究的に解決しようとする力

「みらい科」で育成を目指す資質・能力

		低学年	中学年	高学年
実践力	自分自身に関すること	身近な社会と自分の生活の関わりに目を向け、楽しみながら進んで活動しようとしている	自分の良さや、自分にできることに気付き、それを生かして取り組もうとしている	自分の生活を見直し、自分の良さや自分にできることを理解し、全体を見て自分の役割を考えようとする
	他者や集団とのかかわりに関すること	友だちの良いところを見付けたり、分からないことやできないことは、周りの人に尋ねたりすることができる	身近な人と力を合わせて活動に取り組み、自分と異なる意見や考えがあることに気付き、相手の立場を理解しようとする	異なる意見や他者の考えを受け入れ、尊重しながら活動に取り組み、みんなの思いや願いを実現しようとする
	社会や自然に関すること	身近な社会（学校・地域）に目を向け、愛着をもとうとする	自分と地域のつながりに気付き、地域の活動に関わろうとしている	探究活動を通して、自分と実生活・実社会の問題の解決に取り組もうとする
思考力	問題解決発見力	身の回りの事柄に目を向け、全体で取り組む課題を知り、教師と一緒に活動の見通しをもとうとする	課題を解決するための見通しをもち、手段や方法を考え、実行しようとする	課題を実現するために、見通しをもって可能な解決方法を考え実行することができる
	論理的思考力	調べたり、観察したりしたことに基づいて、自分の考えを表現しようとする	目的を明確にしながら調べたり、根拠をもって表現したりしようとする	根拠をもとに発想を広げて仮説を立てたり、複数の物事の共通点を見出して結果を想定したりしようとする
	批判的思考力	教師や友達との関わりを通して、自分の考えを振り返り、よりよい考えを見つけようとする	自己内対話で思考を深めたり、仲間との関わりの中で、新たな考えを見出したりしようとする	振り返りを通して、自分自身や仲間との関わりについて客観的に考え、次の活動にいかそうとする
	創造的思考力	活動を楽しみながら、次にしてみたいことを考えようとする	考えたことを文字や図表で表したり、関連づけたりしながらよりよくなる工夫を考え実践につなげようとしている	考えたことを視覚的にまとめたり、抽象的に表したりしながら、活動を俯瞰的に捉え、新たな発想で提案しようとする
	メタ認知学び方の学び	学習計画に沿って活動を振り返り、教師と一緒に、その後の学習を修正したり調整したりしようとする	活動を振り返り、自分の達成度や成果を考え、繰り返し取り組もうとしている	活動を振り返り、進捗状況を確かめたり、目的を達成するための見通しをもったりしようとする

【参考文献】
資質・能力を育成する教育課程の 在り方に関する研究報告書 1
～ 使って育てて 21 世紀を生き抜くための資質・能力 ～　　平成 27（2015）年 3 月
研究代表者　髙口 努 （国立教育政策研究所 教育課程研究センター長）

おちろく班

「みらい科」の活動のベースとなる「おちろく班」について説明する。

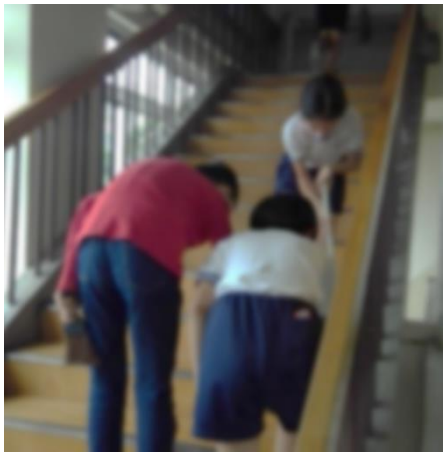
概　要

１年生から６年生までの全校児童を 12 班に分けた縦割り班のこと。１班約 20 名程度で構成されている。４月～12 月までは６年生が班長、１月から３月は５年生が班長として班をまとめる。

主な活動

①おちろく班清掃

週３回、分担された場所を清掃する。掃除の仕方、ほうきの使い方、ごみの集め方、ぞうきんの絞り方などを高学年が下学年に伝える。





②おちろく班遊び

月１回、おちろく班で遊ぶ。遊び場所はローテーションするので、場所に合わせた遊びを班長が考え、活動場所、内容、持ち物など書いたポスターを事前に掲示板に掲示する。





みらい科の実践①

おちろく DASH

身の回りや地域に目を向けて、３～６年生で行う縦割り創造活動について説明する。

育成したい児童

〇思いや願いが実現されていく活動を行うことで、自ら活動に取り組みたいという意欲を育成する。
〇問題解決の必要性やその過程を経験することで、自分で考え、判断できる力を育成する。
〇異学年や実社会、「おちろくマイスター（支援者）」などの「ひと・もの・こと」との出会いをつくることで、自分の考えや思いを大切にしながら行動できる児童を育成する。

活動の概要

縦割り創造活動（通称：おちろくＤＡＳＨ）では、年間 35 時間、おちろく班の３～６年生で活動を行っている。おちろく班２班が合併し１チームとして活動を行う。（令和元年度のみ試験的に１～6年生で活動。）「ＤＡＳＨ会議」では、身の回りの出来事や地域に目を向け、６年生・３～５年生の企画委員・地域協働学校運営委員・ＰＴＡ・教員でその年のＤＡＳＨの活動テーマを決める。そのテーマに沿った活動内容を各班で相談し、活動する。

時期	活動内容
４月	おちろく班顔合わせ
５月	ＤＡＳＨ会議 ＊ＤＡＳＨ会議：６年生・３～５年生の企画委員・地域協働学校運営委員・ＰＴＡ・教員でその年のＤＡＳＨの活動テーマを決める会議
６月	オリエンテーリング（活動テーマの発表） おちろくＤＡＳＨ開始
７月 ～２月	活動内容・活動計画の相談 活動内容にあったおちろくマイスター（支援者）の募集 計画の実行
３月	オープンスクール おちろくＤＡＳＨふりかえり

＊Ｒ２年度は新型コロナウイルス感染症拡大防止のための休校があったため日程を変更して行った。

過去のテーマと活動内容

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
テーマ	落六小を有名にしよう	落合を有名にしよう	常識を超えよう
活動内容	・落合の歴史ドラマ ・おちリンピック ・落六小のＰＶ ・落六ジャムとスプーンづくり ・落六ワクワクストーリー（落合の有名な人紹介ＶＴＲ） ・おちろくちゃんグッズ ・地域の人と交流しよう（落六小ワークショップ）	・おちろくおでん＆ガチャガチャ ・おばけやしき ・竹村農場愛のバジルクッキー ・エコバックをつくろう ・おまつりをしよう ・オリパラを広めよう	・おちろくカーペット ・おちろくスタンプラリー ・宇宙を再現しよう ・落六図鑑をつくろう ・おちろくレストラン＆自動販売機を作ろう ・おちろくテーマパーク

みらい科の実践②

おちろく DASH Jr.

学校や身の回りに目を向けて、１・２年生で行う縦割り創造活動について説明する。

育成したい児童

〇思いや願いが実現されていく活動を行うことで、自ら活動に取り組みたいという意欲をもった児童を育成する。
〇問題を解決する経験を通して、みんなで考えたり、取り組んだりできる児童を育成する。
〇異学年や実社会、「おちろくマイスター（支援者）」などの「ひと・もの・こと」との出会いを通して、自分の考えや思いに気付き、表現しようとする児童を育成する。

活動の概要

おちろくＤＡＳＨ　Ｊｒ．では、年間 35 時間、おちろく班の１・２年生で活動を行っている。おちろく班３班が合併し１チームとして活動を行う。

活動テーマは、教員が決める。そのテーマに沿った活動内容を各班で相談し、活動する。

時期	活動内容
６月	オリエンテーリング（活動テーマの発表） おちろくＤＡＳＨ　Ｊｒ．開始
７月 ～２月	活動内容の相談 活動内容にあったおちろくマイスター（支援者）の募集 活動計画の相談 計画の実行
３月	オープンスクール
	おちろくＤＡＳＨ　Ｊｒ．ふりかえり





みらい科の実践③

オープンスクール

育成したい児童

〇おちろくＤＡＳＨの活動の集大成として、地域の方や保護者を対象にした「オープンスクール」を設定することで、自分たちがこれまで活動してきたことや成果を表現できる児童を育成する。

〇自分が発表したい・認めてもらいたいと思うことを発表できる場を設けることで、自分の良さを表現できる児童を育成する。

活動の概要

おちろくＤＡＳＨの発表と個人発表の２つからなっている。

おちろくＤＡＳＨの発表は、他の班の児童や保護者・地域の方を対象に、各班のおちろくＤＡＳＨの活動の成果を披露する。

また、個人発表は、児童がダンスや合奏・プレゼンテーションなどを発表する。





みらい科の実践④

おちろく班遠足総選挙

育成したい児童

○「遠足の行き先を選ぶ」という、児童の思いや願いが実現されていく活動を通して、６年生のプレゼンテーションを基に自分で判断し、考えることができる児童を育成する。
○遠足の行き先のメリットやデメリットなど自分たちの考えやアイディアを分かりやすく「発信」する機会を創出し、個性を生かした表現方法でプレゼンテーションを行うことで、行動できる児童を育成する。（６年生）

活動の概要

本校では、おちろく班で遠足に行く。その行先は４か所あり、おちろく班ごとに異なる。行き先は「おちろく班遠足総選挙」で決定する。６年生がプレゼンテーションした７か所の中から、投票により、行き先は４か所に絞られる。

時期	活動内容
４月	候補地の下調べ
５月	候補地決定（７か所）
６月	候補地下見（６年生・教員）
７月	総選挙のためのプレゼンテーション作成
８月	
９月	おちろく班遠足総選挙（各班の行き先決定）
１０月	教員実踏 しおり作成（６年）
１１月	遠足









みらい科の実践⑤

おちろく班遠足

育成したい児童

〇児童の「自分たちで選んだ行先に行く」という願いが実現されていく活動を行うことで、自ら活動に取り組みたいという意欲をもった児童を育成する。

活動の概要





過去の行き先

	平成 29 年度	平成 30 年度	令和元年度
活動内容	・恩賜上野動物園 ・昭和記念公園 ・川口グリーンセンター ・井の頭公園	・カップヌードルミュージアム ・すみだ水族館 ・国立科学博物館 ・ギャラクシティ	・平和の森公園フィールドアスレチック ・上千葉砂原公園 ・チームラボプラネッツ ・小金井公園

みらい科の実践⑥

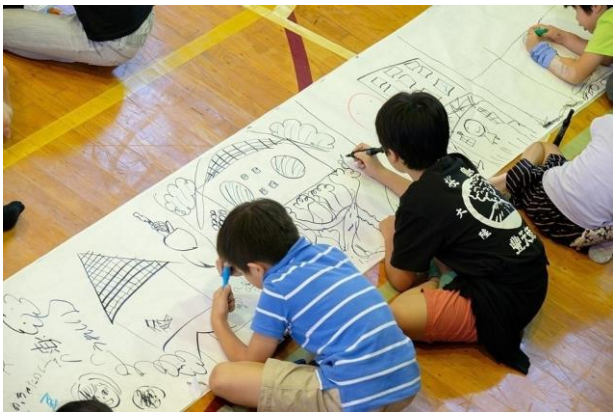
グラフィックレコーディング

育成したい児童

〇議論や対話などを可視化することにより、比較・分類・検討・抽象化しやすくし、考え・判断できる児童の育成をめざす。

活動の概要

「グラフィックレコーディング」とは、議論や対話などをリアルタイムで絵や図などのグラフィックに可視化して記録していくファシリテーションの手法である。講話や会議の内容を一つの絵として見せることで関係性や構造が直感的にわかり、全体を俯瞰できるため、参加者の認識が合わせやすくなり対話の活性化を引き起こし、議論の終了後には記録物となりうるというメリットがある。本校では平成 30 年度より外部企業と連携し、年５時間程度、４～６年生の児童を対象にグラフィックレコーディングのワークショップを行っている。







みらい科の実践⑦

プログラミング

育成したい児童

〇何度でもプログラムを組み直し、試行錯誤することができる活動を通して、論理的思考力を育むとともに、自ら活動に取り組む児童を育成する。

活動の概要

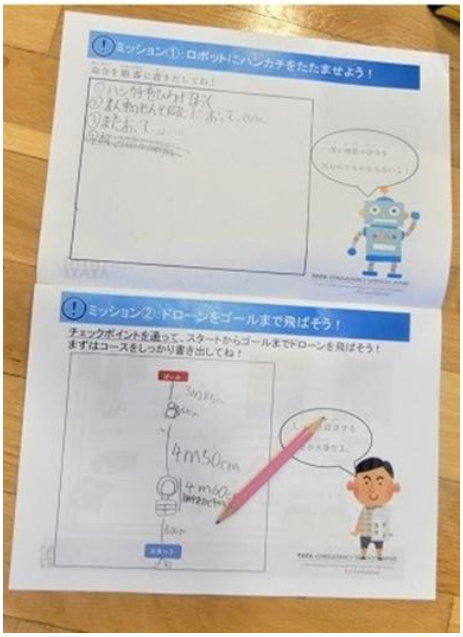
みらい科では、C区分のプログラミングに関する学習活動を行っている。

A	学習指導要領に例示されている単元等で実施するもの
B	学習指導要領に例示されてはいないが、学習指導要領に示される各教科等の内容を指導する中で実施するもの
C	教育課程内で各教科等とは別に実施するもの
D	クラブ活動など、特定の児童を対象として、教育課程内で実施するもの
E	学校を会場とするが、教育課程外のもの
F	学校外でのプログラミングの学習機会

文部科学省「小学校段階のプログラミングに関する学習活動の分類」

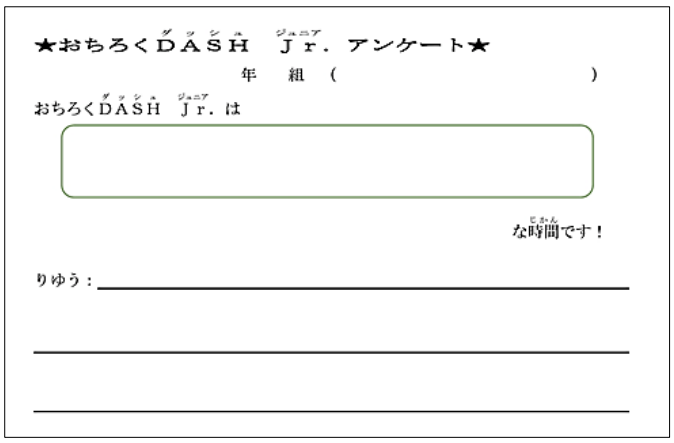






成果と課題

今年度は、おちろく DASH・おちろく DASH　Jr.について、以下のような自由記述式のアンケートを行った。


★おちろくＤＡＳＨ　Ｊｒ．アンケート★
年　組　（　）
おちろくＤＡＳＨ　Ｊｒ．は
な時間です！
りゆう：


★おちろくＤＡＳＨアンケート★
年　組　（　）
おちろくＤＡＳＨは
な時間です！
理由：

1　成果

（1）低学年

「みんなで物を作ったり、意見を重ねたりしていくといいことがある」「一年生と一緒にやって成功するとうれしい」などと、身近な人と関わることの良さを感じている児童が多い。発達段階から考えても、自分から、周りへと思考が広がっていく段階である。意見の食い違いや、ぶつかり合いを経験しながらも、人と関わることの楽しさを感じられていることは大きな成果と言える。

また、「自分たちのやりたいことができるから良い」「いろいろな物を作ることができるから好き」などと、課題や解決方法を選択できることの良さを感じている児童も多かった。低学年において、課題や解決方法を自由に選択できる機会はそれほどない。その中で、やってみたいことに何度も挑戦できることが、意欲の向上や学ぶ楽しさにつながったと考えられる。

（2）中学年

低学年と同じように、身近な人との関わりの良さや、自由度の高さを挙げる児童が多かったのに加え、「自分の意見を出して、物を作っているととても楽しくなる。ありのままでいられる場所」「自分の特技を生かせている」などと、自分の良さに気付き、その個性や得意分野を生かせることの喜びを感じている児童が多く見られた。また、友達の個性を受け止めたり、特技を生かして活動をしたりできているのは、児童相互の肯定的・共感的人間関係が構築されていることの証であろう。

（3）高学年

低・中学年と同様に身近な人との関わりの良さについての意見が多く見られた。中でも、「最高学年としての実感がわく大切な時間だから」「今はぼくたちが高学年だから、責任をもってやるのが楽しい」など、リーダー性について触れる記述が特徴的であった。

また、「自分の中でまだ発揮できていない、眠っている力が DASH をやることで目覚めてくる」「自分で気付いたこと、想像したこと、ひらめくことなどを大切にする時間」「アイディアがないと何も進まない」など、活動の創造性について触れる意見も多かった。これは、おちろく DASH の活動にお

ける、課題や解決方法の自由度の高さが、今までに獲得した知識を基に、児童が考え・判断する場にもなっていることを示していると考えられる。

２　課題

（１）児童アンケートの結果から

「下学年にいろいろなことを教えないといけないから大変」「いろいろな意見があるので、意見が食い違うところがあるが、６年生がまとめなければならないので、難しい」「何かを達成したときは楽しいし、嬉しいけれど、意見が分かれたら何もしないつまらない時間になってしまう」などと、意見の折り合いをつけることの難しさを挙げる児童が複数いた。今後は、教科学習においても、より一層、話し合い活動の充実を図っていく必要がある。

（２）３つの研究の視点から

第一に、おちろくＤＡＳＨやおちろくＤＡＳＨ　Ｊｒ．では「実生活と関わりのあるテーマの設定」をして活動を行っている。しかし、取組を継続することで、活動内容のバリエーションが限られてくる。今後は、活動内容のバリエーションを増やすために、児童とともに、教師も、社会や地域の話題について意識して情報収集を行っておく必要がある。

第二に、「児童の思いや願いを実現するために、本物の技術に触れられる外部講師を積極的に活用していきたい」という教師の思いはあるものの、児童が手伝いを依頼したい内容の講師を見つけることが難しかったり、「どのような講師にお願いできそうか」という考えを児童がもっていなかったりして、有効に外部講師を活用できていない現状がある。引き続き、教科学習においても、外部講師を活用していくとともに、新たな外部講師の発掘に努めていく。

第三に、今年度はコロナ禍のため児童の活動が制限され、外部に向けて、各自が個性を発揮しながら取組を実践していく機会が限られてしまった。まだ、終わりの見えないコロナ禍においても、これまで伸長してきた児童の良さをできる限り発揮できるよう、教員がアイディアを出し合い、活動の場を創出していく必要がある。

（３）その他

第一に、今年度、「みらい科において育成する資質・能力」の全体計画を作成した。本校の児童の活動の様子や実態を見ながら、育成する資質・能力の内容について再考していく必要がある。

第二に、数値化できない学びについて、児童の変容をどのように見取り、評価していくかについても課題が残る。引き続き、肯定的・共感的な人間関係の構築を図るとともに、学校全体で様々な側面での児童の伸びを共有していく必要がある。